

## 第3章 調査結果



### 3.1. 植栽木等調査におけるデータ解析

#### (1) 調査区の概況（空間線量率及び土壤の放射性セシウム現存量）

令和5年度に調査を実施した地点の空間線量率は、植栽木調査区においては $0.08\sim1.23\mu\text{Sv}/\text{h}$ 、成木調査区においては $0.05\sim1.46\mu\text{Sv}/\text{h}$ であった。地下部（堆積有機物及び0~10cm 土壤）の放射性セシウム現存量は、植栽木調査区では $17\sim658\text{kBq}/\text{m}^2$ 、成木調査区では $9.6\sim713\text{kBq}/\text{m}^2$ の範囲にあった。（表 3-1）

図 3-1、図 3-2 に、地下部の放射性セシウム現存量と空間線量率の関係をグラフで示す。空間線量率と放射性セシウム現存量は対応を示しており、大きく傾向から外れる箇所は無かった。調査は適切に実施されたと示唆される。

表 3-1 調査区における空間線量率及び放射性セシウム現存量

樹種	植栽木調査区			成木調査区		
	ID	空間線量率 ( $\mu\text{Sv}/\text{h}$ )	地下部 Cs137現存量 ( $\text{kBq}/\text{m}^2$ )	ID	空間線量率 ( $\mu\text{Sv}/\text{h}$ )	地下部 Cs137現存量 ( $\text{kBq}/\text{m}^2$ )
スギ	SU31	0.08	36.6	SU31A	0.09	60.2
	SU47	0.15	54.7	SU47A	0.20	187.9
	SU57	0.10	18.9	SU57A	0.10	37.0
	SU69	0.22	106.6			
	SU70	0.55	658.3			
	SU71	0.16	96.9			
	SU72	0.45	257.1			
ヒノキ	HI01	0.23	65.9	HI01A	0.08	15.4
	HI10	0.11	30.6	HI11A	0.10	18.8
	HI11	0.12	58.2	HI22A	0.30	115.7
	HI21	0.41	220.6	HI23A	0.15	41.1
				HI24A	0.15	100.2
アカマツ	MA31	0.30	187.7	MA31A	0.61	368.3
	MA43	1.23	510.3	MA43A	1.46	712.9
	MA45	0.27	209.8	MA45A	0.43	323.0
カラマツ	KA08	0.09	17.3	KA08A	0.05	9.6
	KA14	0.13	65.6	KA14A	0.09	51.2
	KA18	0.15	83.5	KA18A	0.36	195.4
コナラ(植栽木)	KO03	0.15	35.8	KO03A	0.27	150.1
	KO16	0.17	84.5	KO16A	0.22	78.0
	KO39	0.19	141.7	KO39A	0.22	124.9
コナラ(ぼう芽木)	KO05	0.16	65.8	KO05A	0.31	160.4
	KO15	0.15	64.4	KO15A	0.21	94.7
	KO38	0.21	71.1	KO38A	0.20	131.5
クヌギ	KN14	0.10	22.5	KN14A	0.13	92.6
	KN17	0.10	27.7	KN17A	0.14	67.3
	KN22	0.24	122.0	KN22A	0.10	34.3

空間線量率は調査区内 5 点の平均値、Cs137 現存量は 1 調査区あたり 3 箇所で採取した平均値

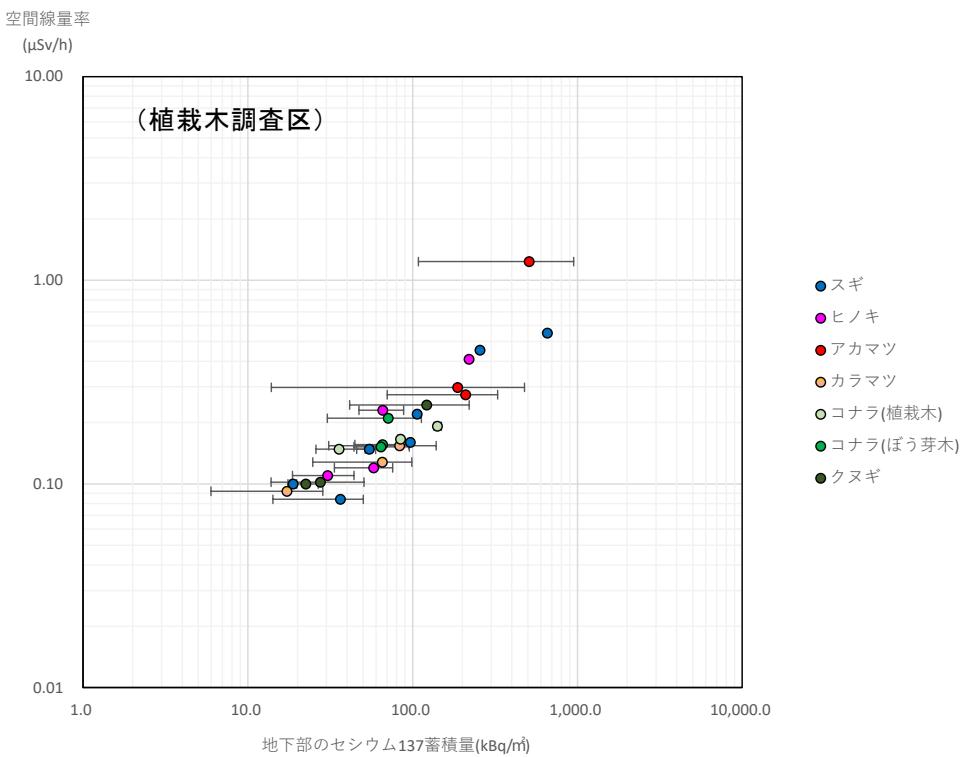


図 3-1 令和5年度の植栽木調査区における地下部の放射性セシウム現存量と空間線量率の関係  
「地下部」は堆積有機物及び土壌の合計。1 調査区あたり 3 箇所の平均値を示す。エラーバーは最大最小を示す。

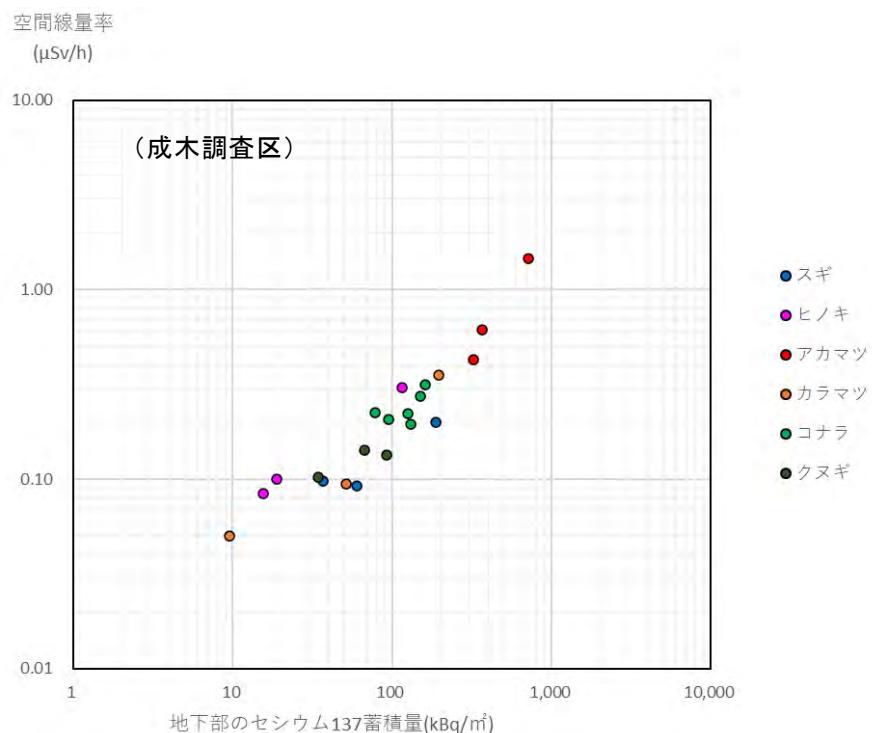


図 3-2 令和5年度の成木調査区における地下部の放射性セシウム現存量と空間線量率の関係  
成木調査区においては 1 調査区あたり 3 箇所で採取した土壌等を混合分析しているためエラーバーはない。

## (2) 植栽木に係る解析

### 1) 植栽木の樹種別、部位別のセシウム 137 濃度

植栽木調査結果について、部位別（及び土壌層位別）の放射性セシウム濃度を、樹種毎に図 3-3 に示す。部位ごとに 2 つの箱ひげを並べており、令和 3 年度（左）及び令和 5 年度（右）の同地点での結果を比較した。

部位別には、どの樹種も材（木部）の放射性セシウム濃度が最も低い傾向を示した。また、当年葉や当年枝の放射性セシウム濃度が高いなど、部位別の放射性セシウム濃度の大・小関係は、どの樹種も大きな違いではなく、特殊な傾向はみられない。

経年の変化としては、土壌はどの調査区でも全体的に放射性セシウム濃度が下がっており、地上部については、樹種により増減の傾向が異なる。全体的には当年葉や当年枝の放射性セシウム濃度が高くなったものが多く、アカマツ及びクヌギについてはどの部位も濃度が低下した。

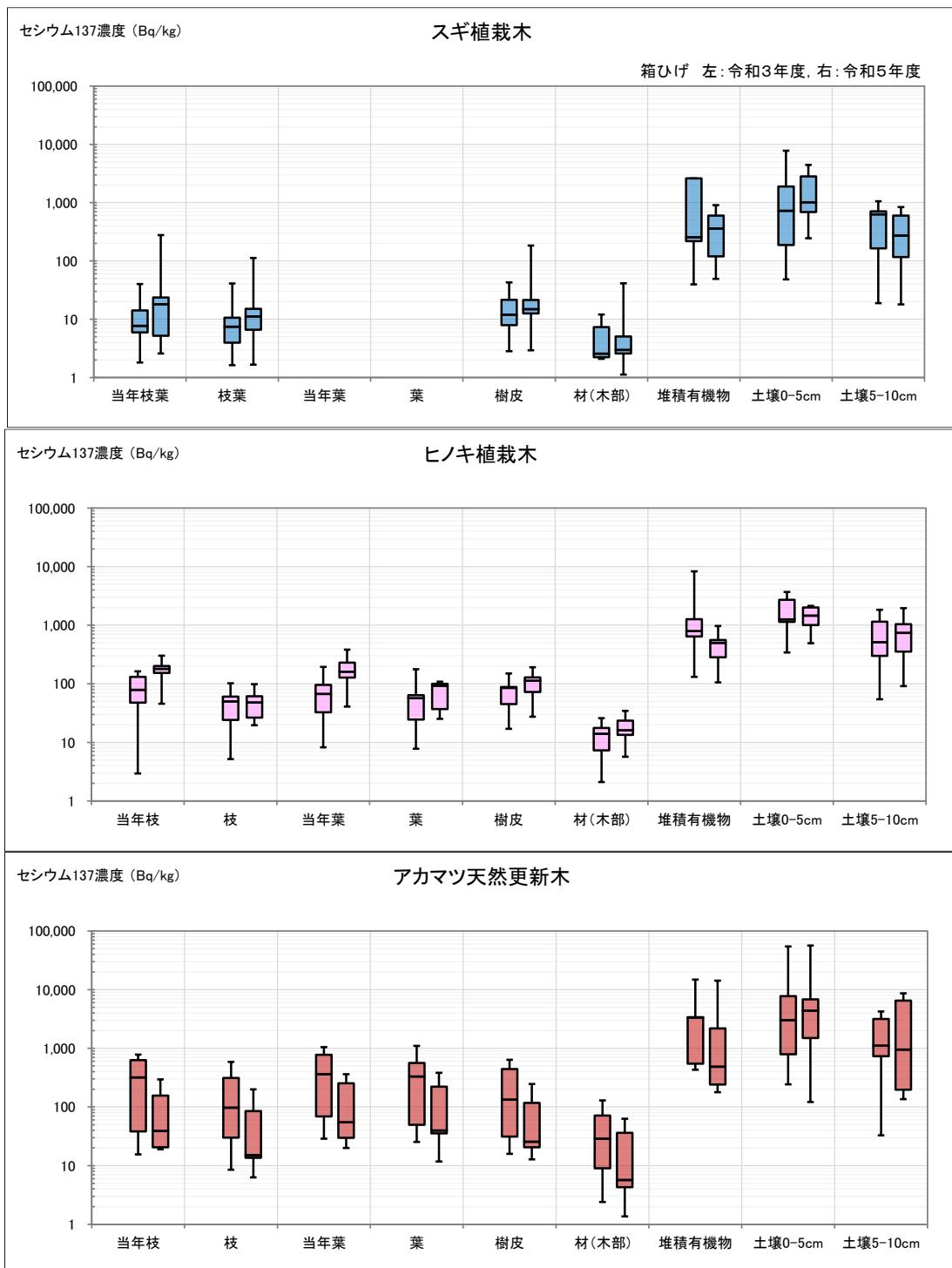


図 3-3 植栽木調査における部位別・土壌層位別の放射性セシウム濃度

令和3年度及び令和5年度の結果を示す。樹種ごとに同地点（各 n=3）での経年比較を示す。

箱ひげ図の箱は第3四分位と第1四分位、間の線は中央値、ひげは最大値と最小値を示す。

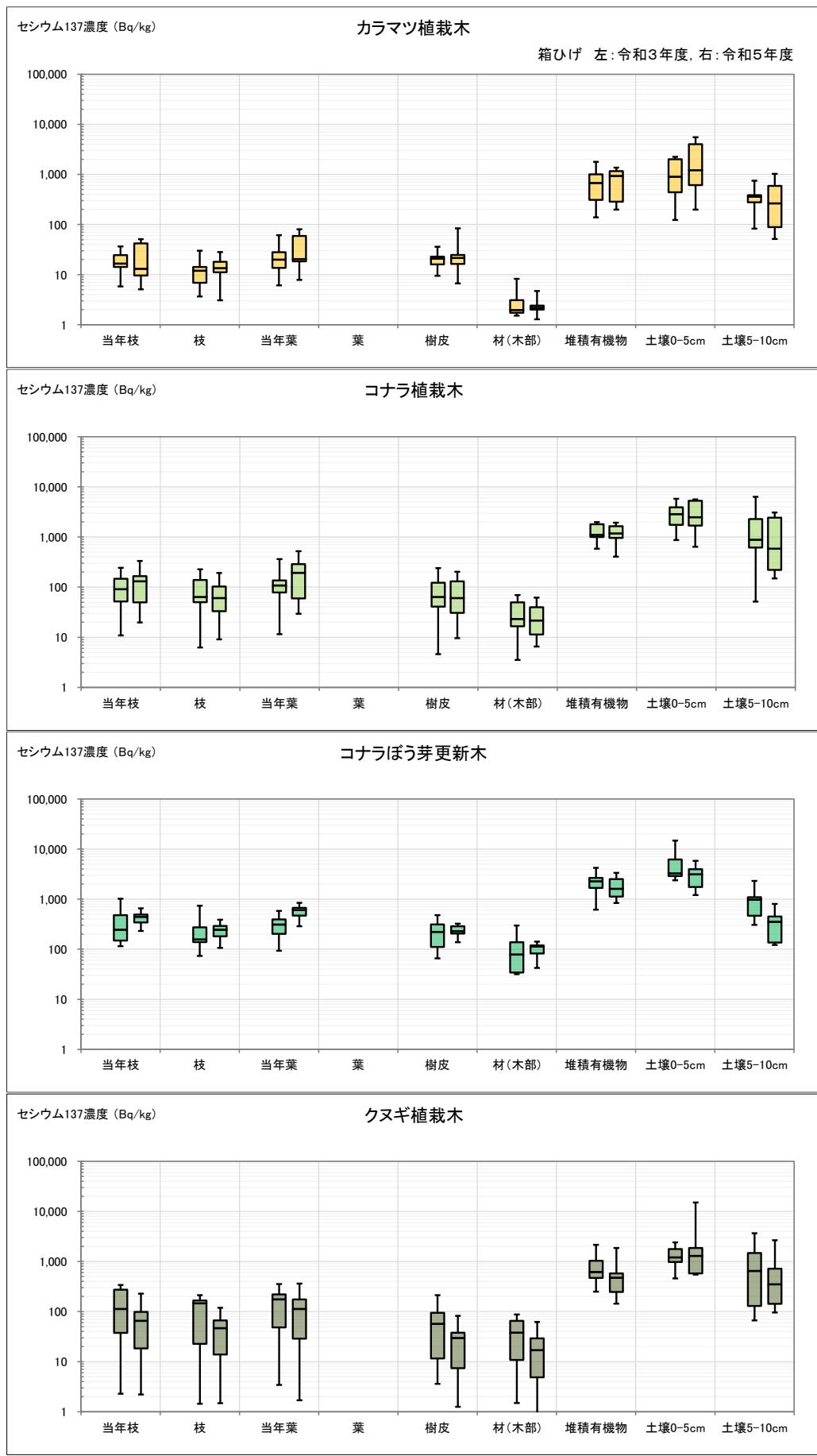


図 3-3 植栽木調査における部位別・土壤層位別の放射性セシウム濃度(つづき)

## 2) 植栽木の当年枝等面移行係数と土壤の交換性カリウム現存量等化学性の関係

### ① 樹種別面移行係数

当年枝及び当年葉の面移行係数を樹種別に図 3-4 に示す。樹種ごとに 2 つの箱ひげを並べ、令和 3 年度（左）及び令和 5 年度（右）の同地点での結果を比較した。

面移行係数は  $0.01 \sim 0.0001 \text{ m}^2/\text{kg}$  の範囲にあるものが多いが、樹種により差がみられる。スギは調査地 1 箇所で非常に高い面移行係数が確認されたものの、低い値を示すものが多く、四分位範囲（箱ひげ図の箱）が  $0.001 \text{ m}^2/\text{kg}$  より低い。スギ、アカマツ、カラマツの面移行係数が同様の水準にあり、面移行係数が低い傾向にある。

令和 3 年度と令和 5 年度を比較して、面移行係数が高くなった樹種は、コナラぼう芽木とクヌギで、コナラぼう芽木の面移行係数は全樹種の中で最も高い。

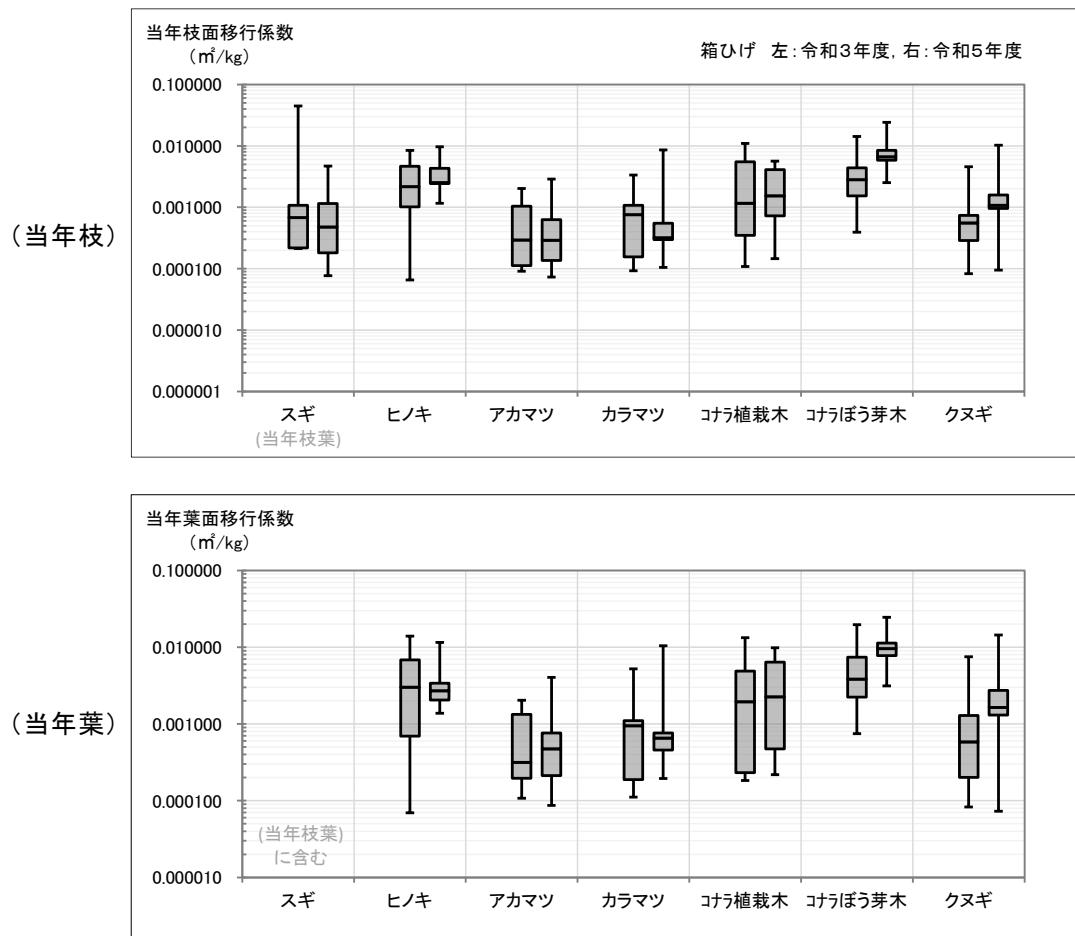


図 3-4 植栽木調査における樹種別の当年枝等面移行係数

令和 3 年度及び令和 5 年度の結果を示す。樹種ごとに同地点（各  $n=3$ ）での経年比較を示す。

箱ひげ図の箱は第 3 四分位と第 1 四分位、間の線は中央値、ひげは最大値と最小値を示す。

## ② 土壤化学性と面移行係数の関係

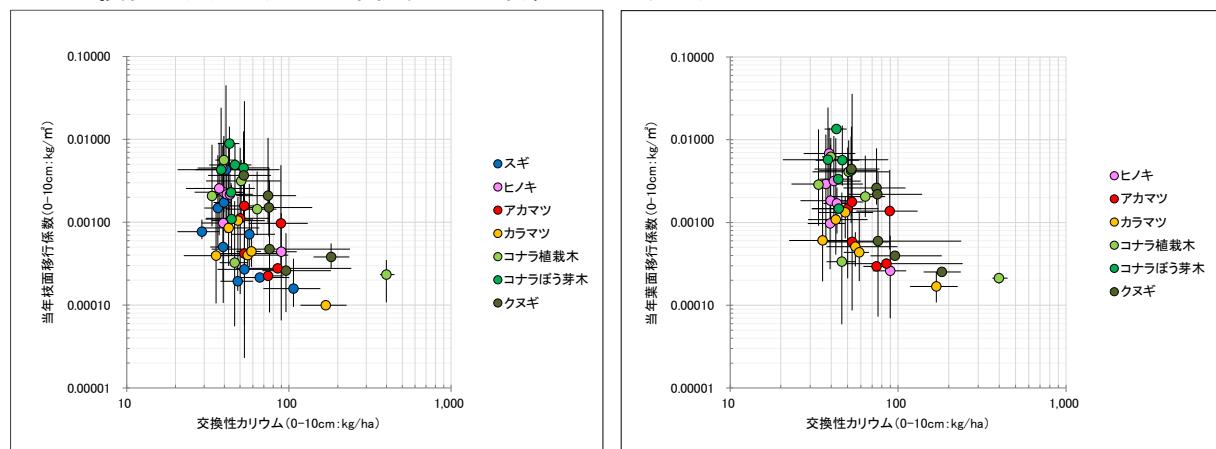
植栽木調査における当年枝等面移行係数と土壤中交換性塩基類との関係を図3-5、図3-6に示す。令和3年度から令和5年度の結果を用いて、各年度各調査区で3本（箇所）採取した結果を、点（平均値）とエラーバー（最大最小）による林分単位で図示した。令和3年度の調査区は令和5年度に同地点で調査を実施しており、合計6本による結果として示した。

当年枝面移行係数での図を左、当年葉面移行係数での図を右に並べて示した。両者の散布図において違いはあまりみられないが、当年葉面移行係数の方はばらつきがやや小さいように見受けられる。

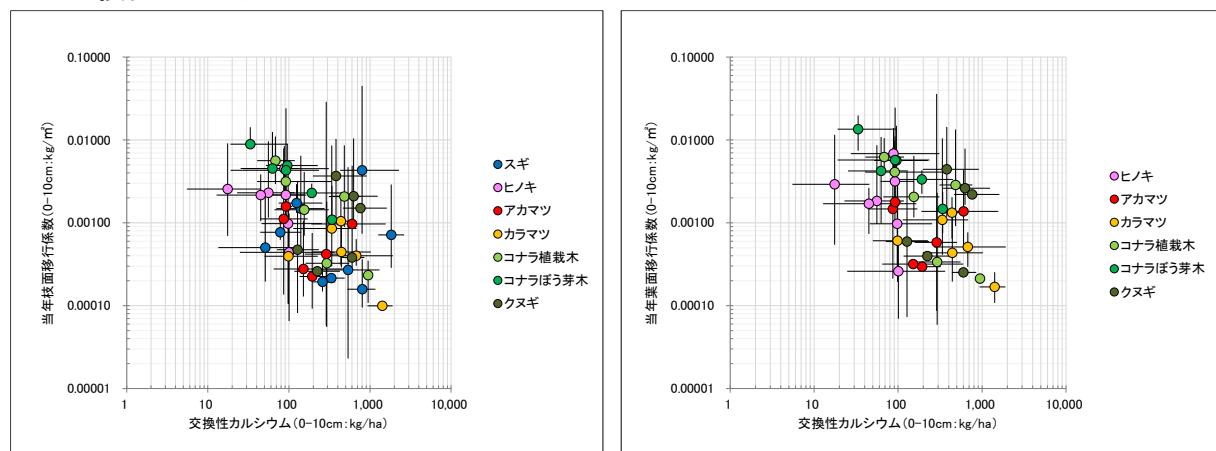
令和3年度の結果だけでは、団子状になって傾向がほぼみられなかつたが、令和4年度の調査結果を合算すると、既往の知見同様に、土壤中交換性塩基類に対して面移行係数が右下がりになる傾向が表れた。さらに令和5年度の調査結果を加えて地点平均値を更新し、また、新規設定調査区によるプロットを追加した。令和3年度から令和5年度までの結果を総合すると、令和4年度までの傾向とほぼ同様であるが、カリウム、カルシウム、マグネシウムのいずれも面移行係数が右下がりになる傾向がみられるものの、その中で比較的明瞭な傾向がみられるのはカリウムであった。

0-10cmでの傾向（図3-5）と、0-5cmでの傾向（図3-6）には大きな違いはみられない。

**a 交換性カリウム(左:当年枝、右:当年葉 以下同じ)**



**b 交換性カルシウム**



**c 交換性マグネシウム**

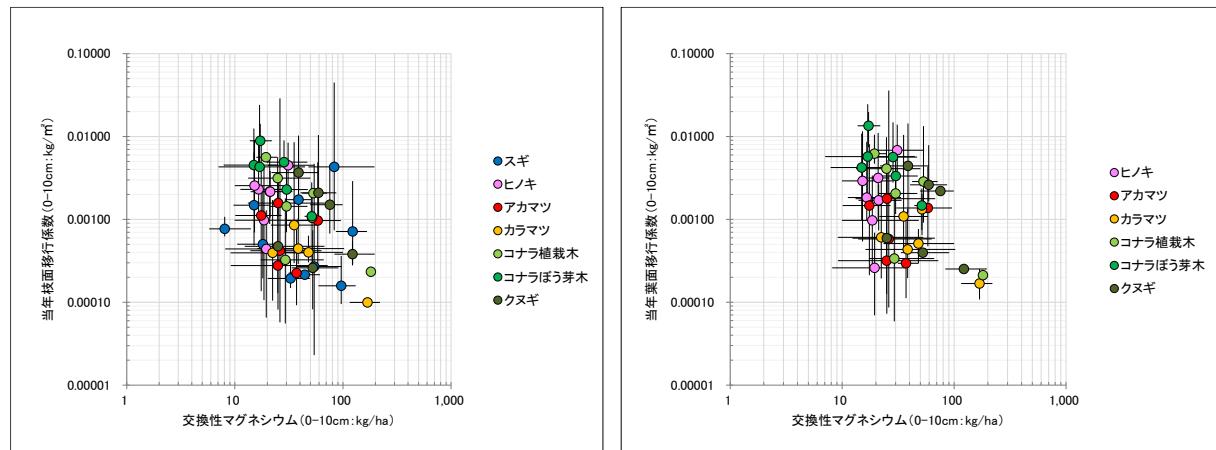
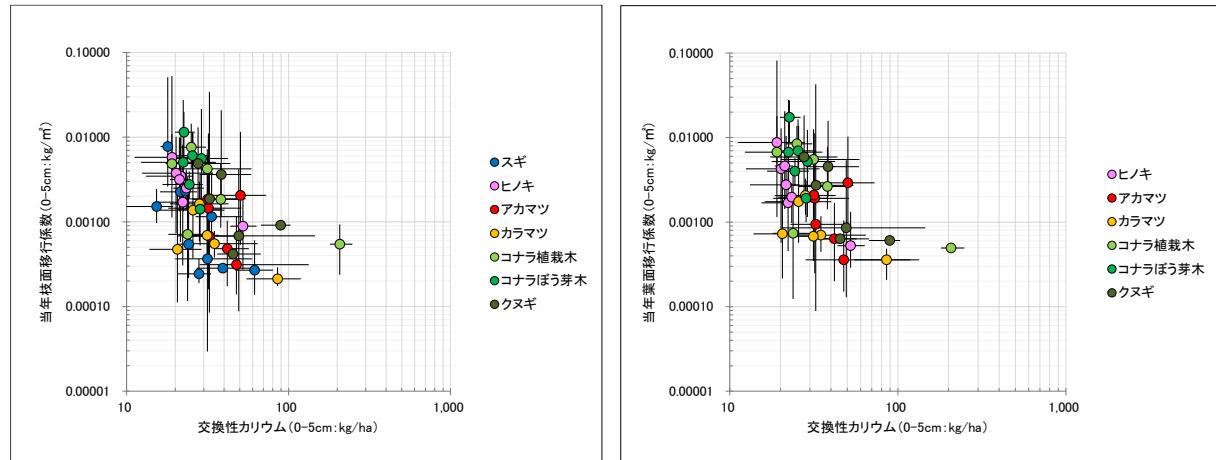


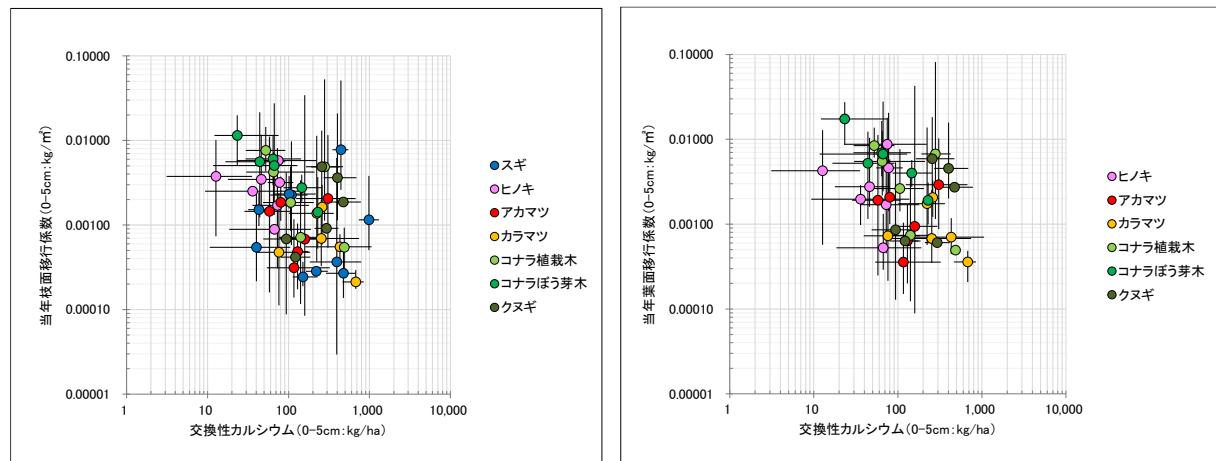
図 3-5 土壤中交換性塩基類と当年枝等面移行係数の関係(0-10cm 層)

令和 3 年度から令和 5 年度の結果を示す。令和 3 年度設定調査区は令和 5 年度の調査結果も加えた n=6, それ以外は 1 調査区あたり 3 箇所(n=3)で採取した平均値をプロットし、エラーバーは最大最小を示す。

**a 交換性カリウム(左:当年枝、右:当年葉 以下同じ)**



**b 交換性カルシウム**



**c 交換性マグネシウム**

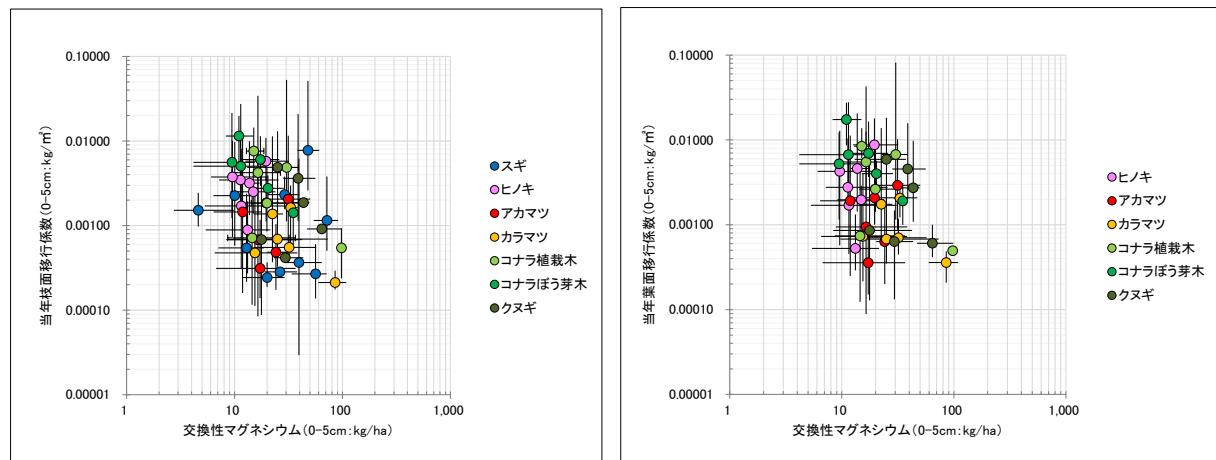


図 3-6 土壤中交換性塩基類と当年枝等面移行係数の関係(0-5cm 層)

令和3年度から令和5年度の結果を示す。令和3年度設定調査区は令和5年度の調査結果も加えた n=6, それ以外は1調査区あたり3箇所(n=3)で採取した平均値をプロットし、エラーバーは最大最小を示す。

### 3) 植栽木の当年枝と材のセシウム 137 濃度の関係

植栽木調査における個体ごとの当年枝の放射性セシウム濃度と、材や樹皮の放射性セシウム濃度の関係を図 3-7、図 3-8 に示す。

当年枝と樹皮の関係も、当年枝と材の関係も、両対数のグラフ上で傾き 1 の直線に沿って点が分布していることから、放射性セシウム濃度の関係が、どの樹種も共通して、一次関数的な相関関係にあることが示唆される。ただし、放射性セシウムの吸収特性は樹種により異なることが指摘される<sup>4</sup>ため、樹種別に評価する必要がある。樹種別のグラフを図 3-9、図 3-10 に示す。図 3-10 に示した赤線は回帰直線を表す（切片がある場合、両対数グラフ上では直線にならない。また、切片は 0 以上になる前提として、負の値になる場合には 0 として示した。）。

当年枝と材の放射性セシウム濃度の関係は直線関係で、直線の傾きから、当年枝の放射性セシウム濃度を 1 とした場合に、材の放射性セシウム濃度は、0.07～0.27 程度とみられる。当年枝に対する材の放射性セシウム濃度の比が小さいのは、スギ (0.16)、ヒノキ (0.07)、アカマツ (0.13)、コナラ植栽木 (0.18) で、クヌギ (0.24)、コナラぼう芽木 (0.27) がそれよりも高めであった。

---

<sup>4</sup> 森林総研との意見交換会（令和 4 年度）による

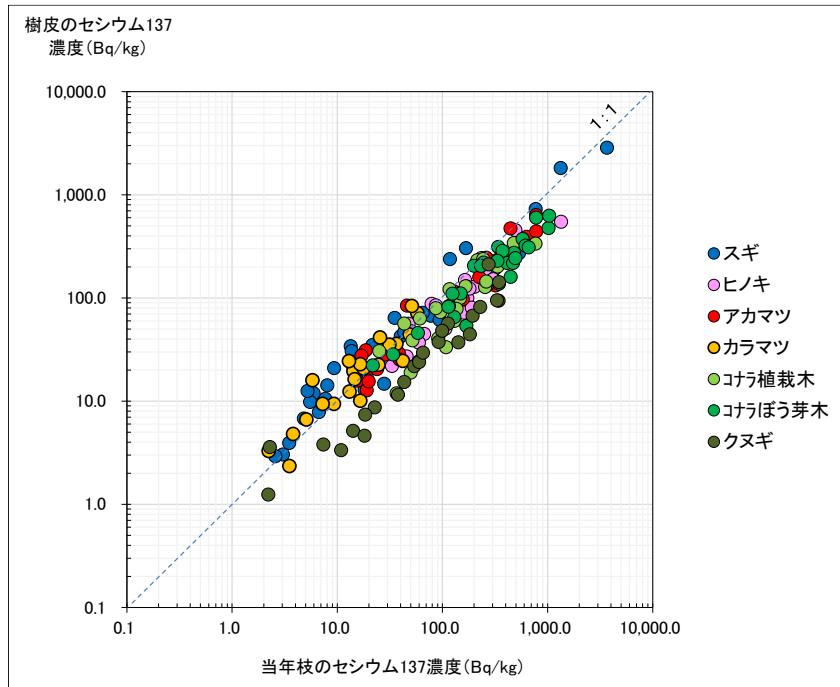


図 3-7 植栽木の当年枝と樹皮の放射性セシウム濃度の関係

令和3年度～令和5年度の結果を示す。1個体あたり1点で示し、不検出(ND)は除外した。

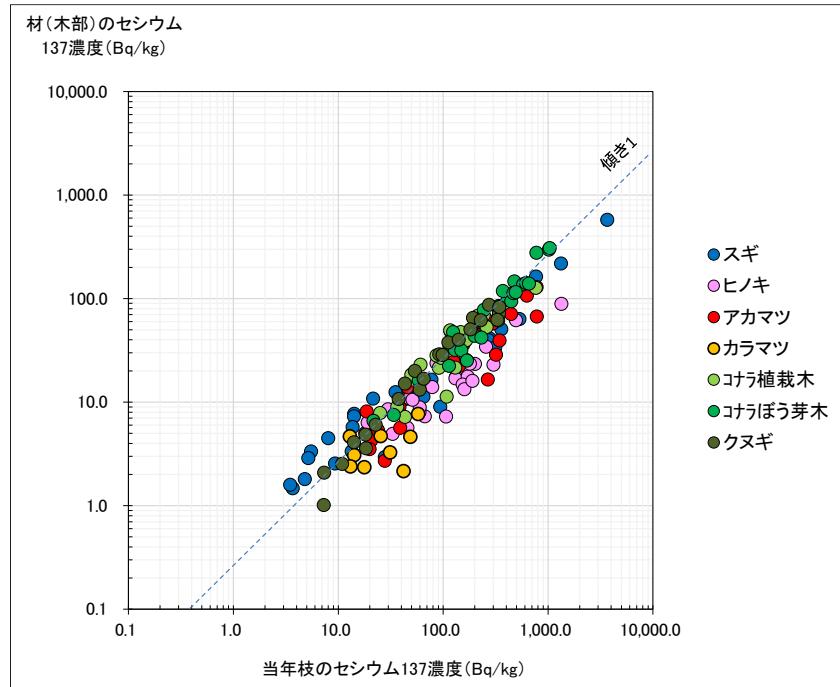


図 3-8 植栽木の当年枝と材の放射性セシウム濃度の関係

令和3年度から令和5年度の結果を示す。1個体あたり1点で示し、不検出(ND)は除外した。

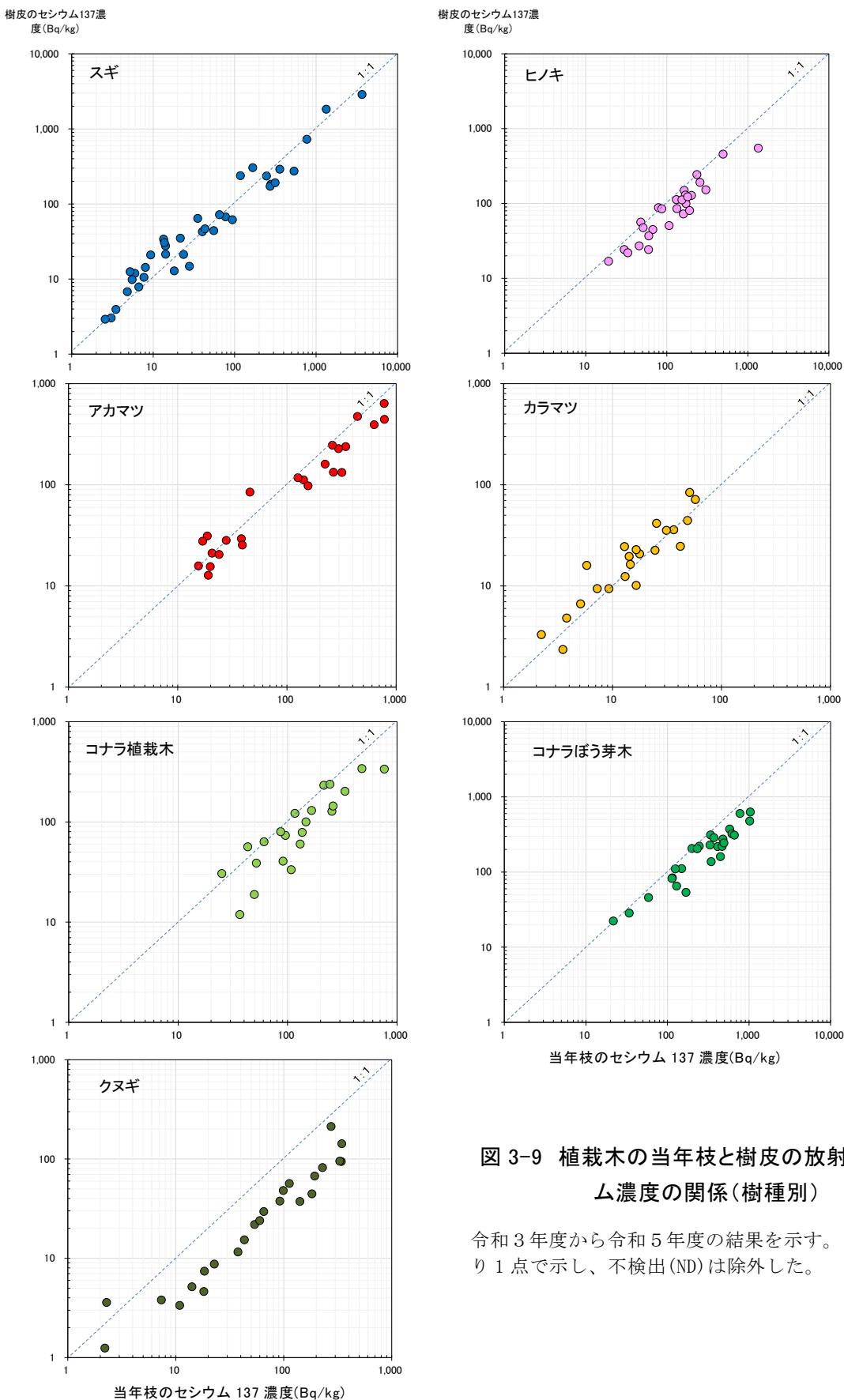
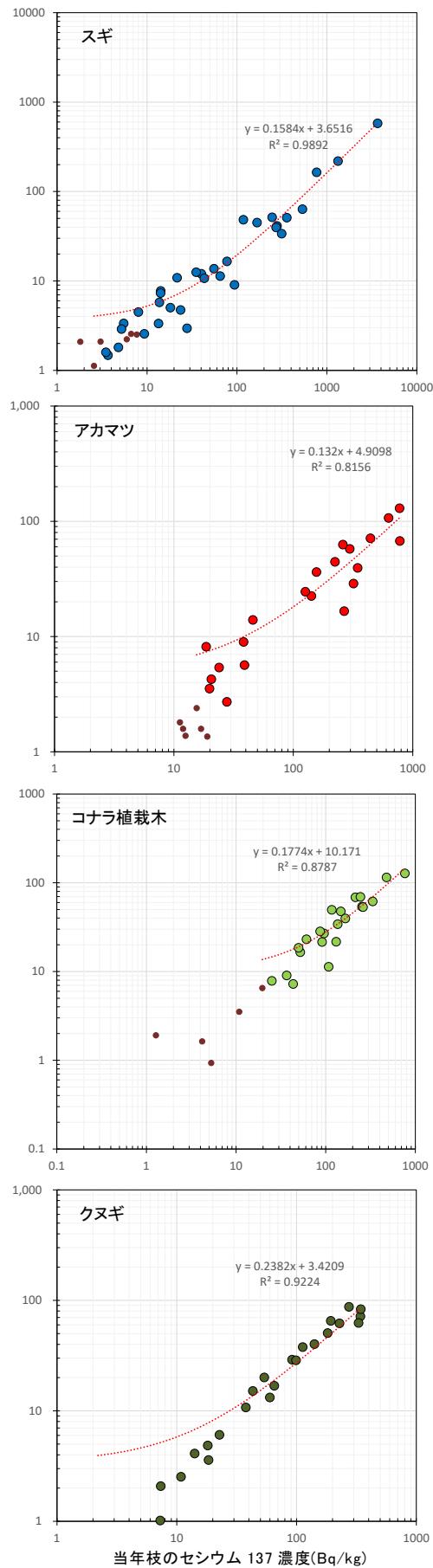


図 3-9 植栽木の当年枝と樹皮の放射性セシウム濃度の関係(樹種別)

令和 3 年度から令和 5 年度の結果を示す。1 個体あたり 1 点で示し、不検出(ND)は除外した。

材(木部)のセシウム  
ム137濃度(Bq/kg)



材(木部)のセシウム  
ム137濃度(Bq/kg)

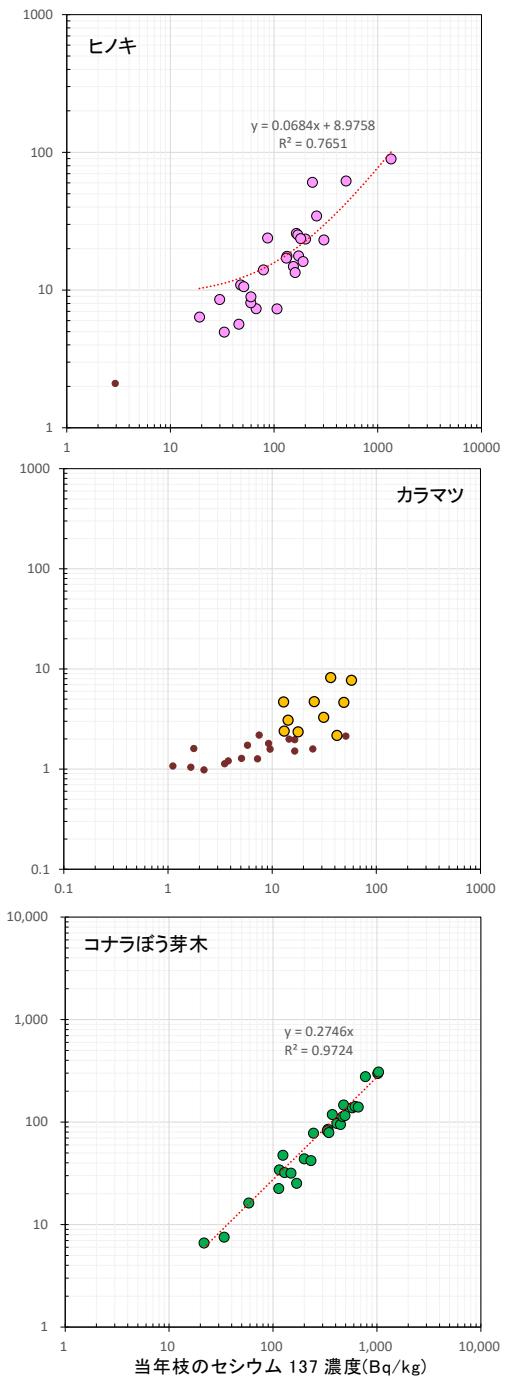


図 3-10 植栽木の当年枝と材(木部)の放射性セシウム濃度の関係(樹種別)

令和3年度～令和5年度の結果を示す。1個体あたり1点で示す。不検出(ND)による推計値は小さい点●で示し除外した上で回帰式を求めた。カラマツはNDを除外したデータ個数が少ないので回帰式を示していない。

### (3) 成木に係る解析

#### 1) 成木の樹種別、部位別のセシウム 137 濃度

成木調査結果について、部位別（及び土壌層位別）の放射性セシウム濃度を、樹種毎に図3-11に示す。樹種ごとに2つの箱ひげを並べ、令和3年度（左）及び令和5年度（右）の同地点での結果を比較した。

部位別には、材（木部）の放射性セシウム濃度が最も低い傾向を示したが、クヌギについては、内樹皮の放射性セシウム濃度が低く、材と内樹皮が同程度であった。クヌギの内樹皮は他の樹種よりも厚みがあり、相対的に濃度が低くなっている可能性がある。

スギは箱ひげ図の箱やエラーバーが他の樹種よりも大きく、ばらつきが大きかったことが言えるが、汚染程度の異なる調査地による影響が大きいと考えられる。

経年の変化としていずれの樹種でも共通してみられた傾向は特にないものの、材（木部）の放射性セシウム濃度については、横ばいか減少の傾向にあった。

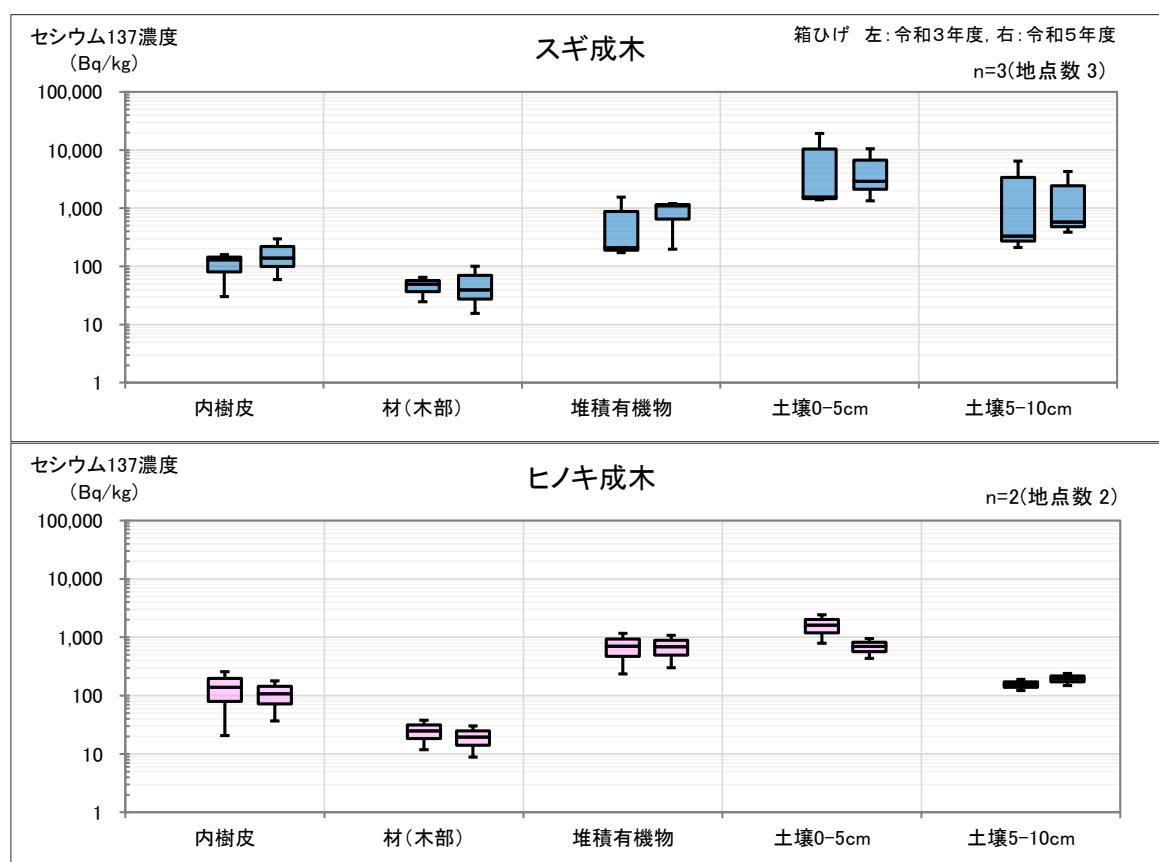


図 3-11 成木調査における部位別・土壌層位別の放射性セシウム濃度

令和3年度及び令和5年度の結果を示す。

箱ひげ図の箱は第3四分位と第1四分位、間の線は中央値、ひげは最大値と最小値を示す。

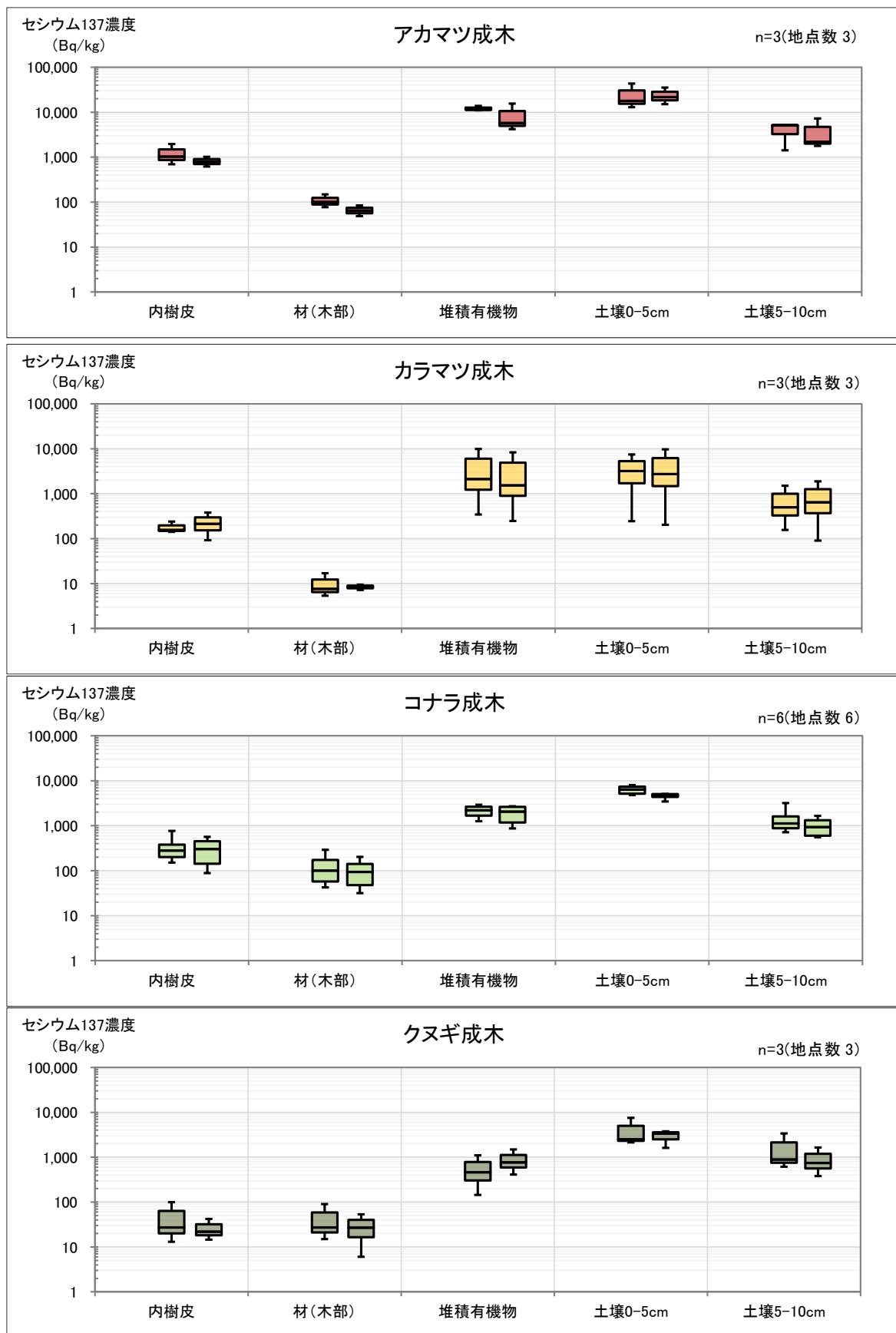


図 3-11 成木調査における部位別・土壌層位別の放射性セシウム濃度(つづき)

## 2) 成木の内樹皮面移行係数と土壤の交換性カリウム現存量等化学性の関係

### ① 樹種別面移行係数（成木）

成木内樹皮の面移行係数を樹種別に図3-12に示す。樹種ごとに2つの箱ひげを並べ、令和3年度（左）及び令和5年度（右）の同地点での結果を比較した。

内樹皮の面移行係数は $0.001\sim0.01\text{ m}^2/\text{kg}$ の範囲にあるものが多い。内樹皮の放射性セシウム濃度が全体的に低かったクヌギについては、面移行係数が他の樹種よりも低めであった。

材への放射性セシウムの移行を評価する必要があるため、材の面移行係数について下図に示す。材の面移行係数は $0.0001\sim0.01\text{ m}^2/\text{kg}$ の範囲にあるものが多く、樹種別に比較すると、アカマツとカラマツの材面移行係数が低めであった。内樹皮の面移行係数が低かったクヌギは、材については他の樹種と比べて中庸である。

経年の変化として特徴的な傾向はみられていない。

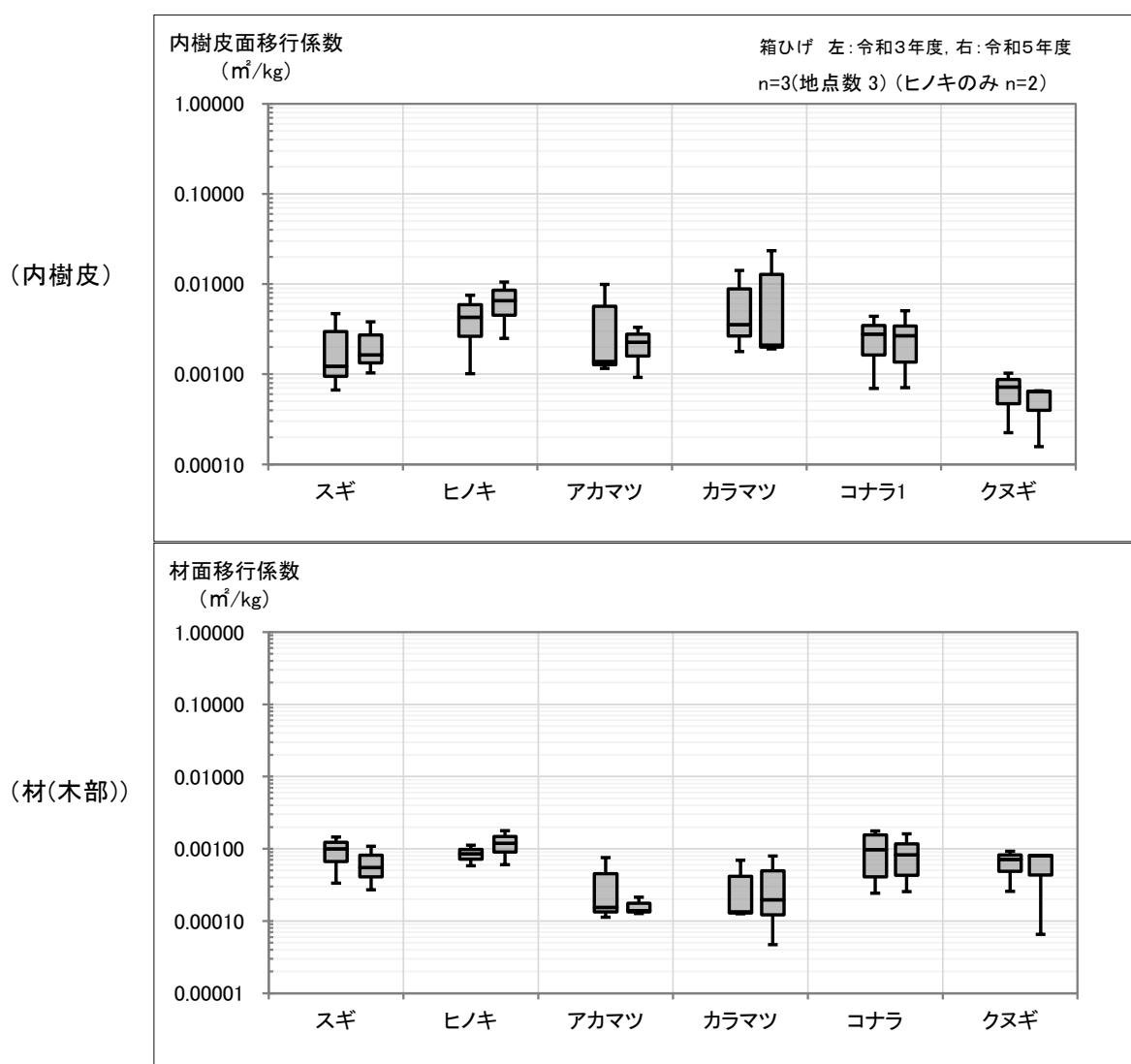


図3-12 成木調査における樹種別の内樹皮等面移行係数

令和3年度及び令和5年度の結果を示す。樹種ごとに同地点（各n=3、ただしヒノキのみn=2）での経年比較を示す。箱ひげ図の箱は第3四分位と第1四分位、間の線は中央値、ひげは最大値と最小値を示す。

## ② 土壌化学性と面移行係数の関係（成木）

成木調査における内樹皮面移行係数と土壤中交換性塩基類との関係を図3-13に示す。植栽木調査と分析に際しての取り扱いが異なり、各調査区で3本（箇所）採取したものを混合してGe分析しているため、1地点で値が1つのみとなるためエラーバーの表示はない。1点ごとに林分単位で図示したものとなる。

また、左に0-10cm 土壤でのグラフ、右に0-5 cm 土壤でのグラフを示した。

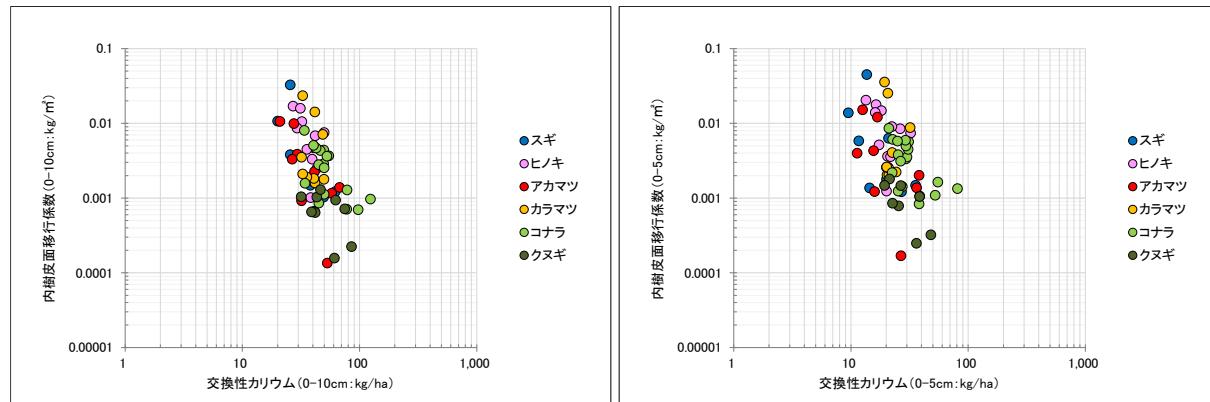
令和3年度の結果だけでは、傾向がほぼみられなかつたが、令和4年度の調査結果を合算すると、土壤中交換性カリウムに対しては、面移行係数が右下がりになる傾向が表れた。令和5年度の結果を追加したことにより明瞭な傾向が示された。他の塩基類（カルシウム、マグネシウム）については、ばらつきが大きく、傾向は示されなかつた。

0-10cm での傾向と、0-5 cm での傾向を比較して、土壤中交換性カリウムと面移行係数との関係は0-10cm でばらつきが小さく（図3-13 a 左）、より明瞭な傾向が示されている。

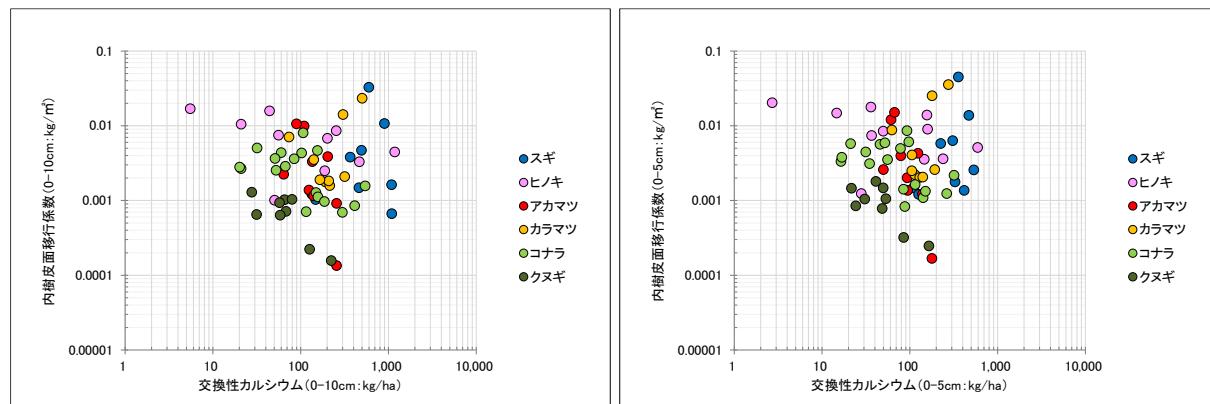
(0-10cm 土壤層位)

(0-5cm 土壤層位)

### a 交換性カリウム



### b 交換性カルシウム



### c 交換性マグネシウム

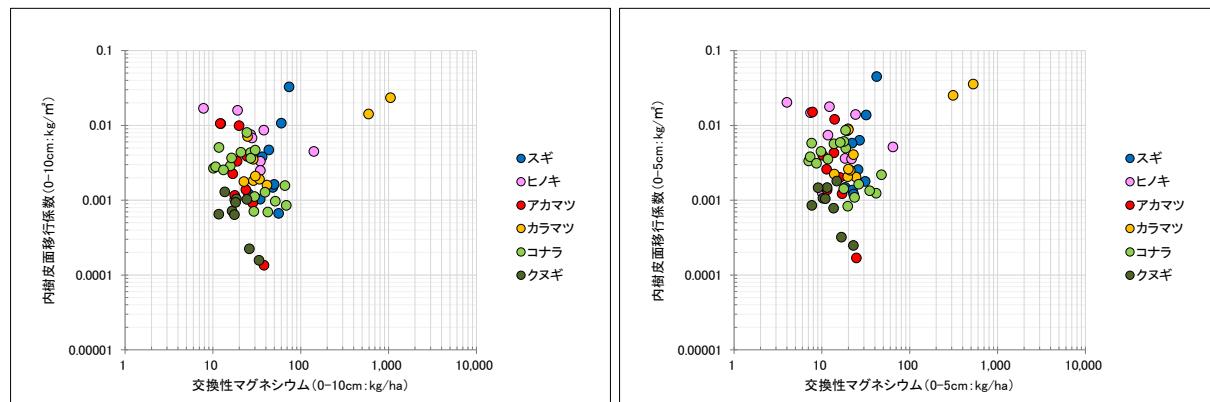


図 3-13 土壤中交換性塩基類と成木内樹皮面移行係数の関係

令和3年度から令和5年度の結果を示す。1調査区あたり1点で示す。

### 3) 成木の樹種別の内樹皮と材のセシウム 137 濃度の関係

成木調査における試料木の内樹皮の放射性セシウム濃度と、材の放射性セシウム濃度との関係を図 3-14 に示す。植栽木調査とは異なり、個体ごとではなく 3 本の試料木から採取したサンプルを混合した林分単位での値での取り扱いとなる。

ばらつきが大きいものの、両対数グラフで傾き 1 の正の関係がみられる。先述 3.1. (2) 3) のとおり、放射性セシウムの吸収特性は樹種により異なると考えられることから、樹種ごとの関係を図 3-15 に示す。赤線は回帰直線を表す。直線の傾きから、内樹皮と材の関係（比）は、内樹皮の放射性セシウム濃度を 1 としたときに、材の放射性セシウム濃度は 0.10～0.78 と、樹種により違いが大きい。内樹皮に対して材の放射性セシウム濃度が小さいのは、スギ（0.26）、ヒノキ（0.22）、アカマツ（0.10）、カラマツ（※ばらつきが大きいため回帰式を示さない）で、一方、広葉樹 2 樹種はコナラ（0.36）、クヌギ（0.78）と大きかった。今後もデータを増やしたうえで、精度を高めて評価する必要がある。

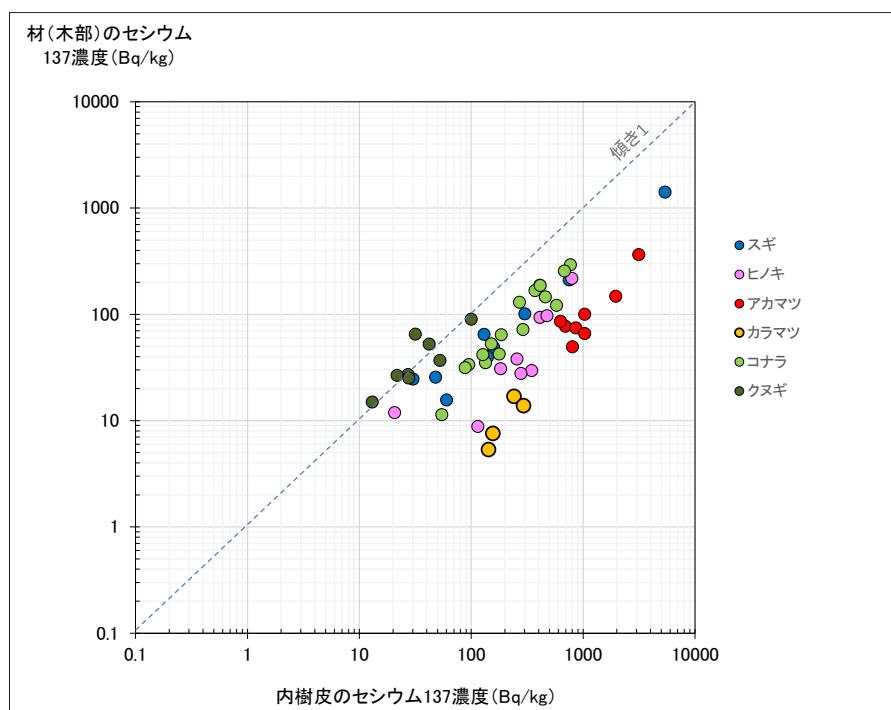


図 3-14 成木の内樹皮と材の放射性セシウム濃度の関係

令和 3 年度から令和 5 年度の結果を示す。1 調査区あたり 1 点で示し、不検出（ND）は除外した。

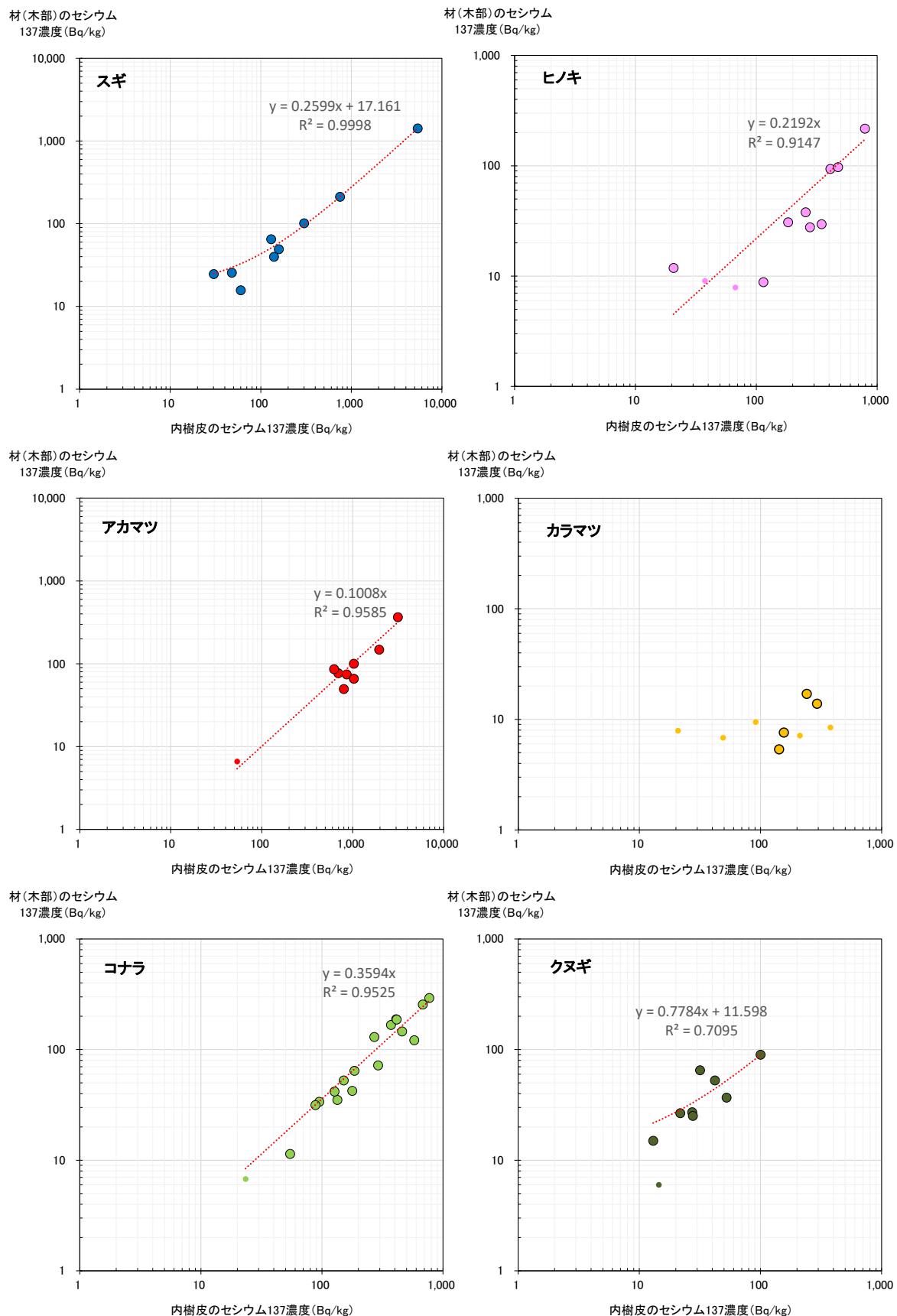


図 3-15 成木の内樹皮と材の放射性セシウム濃度の関係(樹種別)

令和3年度から令和5年度の結果を示す。1調査区あたり1点で示す。赤線は回帰直線を表す。不検出(ND)による推計値は小さい点●で示し除外した上で回帰式を求めた。カラマツはNDを除外したデータ個数が少ないので回帰式を示していない。

#### (4) その他解析

##### 1) 土壤のセシウム 137 蓄積量と樹種別、部位別のセシウム 137 吸収量（蓄積量）

植栽木調査の各調査区における蓄積量調査（i 調査区の毎木調査 → ii 平均胸高直径の算出 → iii 平均胸高直径を基準とした標準的な試料木3本の選定 → iv 試料木の伐倒と部位別生重量の測定 → v 部位別試料の採取（サンプリング）→ vi 室内における樹皮と材（木部）の分離と生重量測定等及び、材（木部）のチップ化等試料の調整 → vii 分析測定機関における試料の乾燥と各種分析）から、バイオマス現存量を整理した。バイオマス現存量の調査結果については、報告書本文では示さず巻末の付表とする。

バイオマス現存量と、部位別の放射性セシウム濃度の測定結果を用いて、各調査区の放射性セシウム蓄積量を求めた。図3-16に樹種別、部位別の放射性セシウム蓄積量について、割合の棒グラフで示した。

令和3年度と令和5年度の調査結果を比較すると、スギ、ヒノキ、カラマツについては、部位別放射性セシウム蓄積量の割合の変化が比較的小さい。アカマツについては、木部の放射性セシウム蓄積量の割合が大きくなっている。コナラは植栽木及びぼう芽更新木とともに割合の変化が大きく、主に葉の放射性セシウム蓄積量の割合に違いがみられるが、これは、調査時期が令和3年度と令和5年度で違いがあり、今年度は落葉開始前に葉を採取しているため、落葉の前後で調査時期が違うことが影響している可能性がある。

部位別放射性セシウム蓄積量については、今年度実施した繰り返し調査に加え、来年度も同様に実施する繰り返し調査の結果を合わせ、その変化量を基に将来予測に資する解析を行っていくことが重要となる。また、それに当たっては、調査区の植栽年や施業履歴等の情報も重要であるため、正確なデータ収集・整理が求められる。

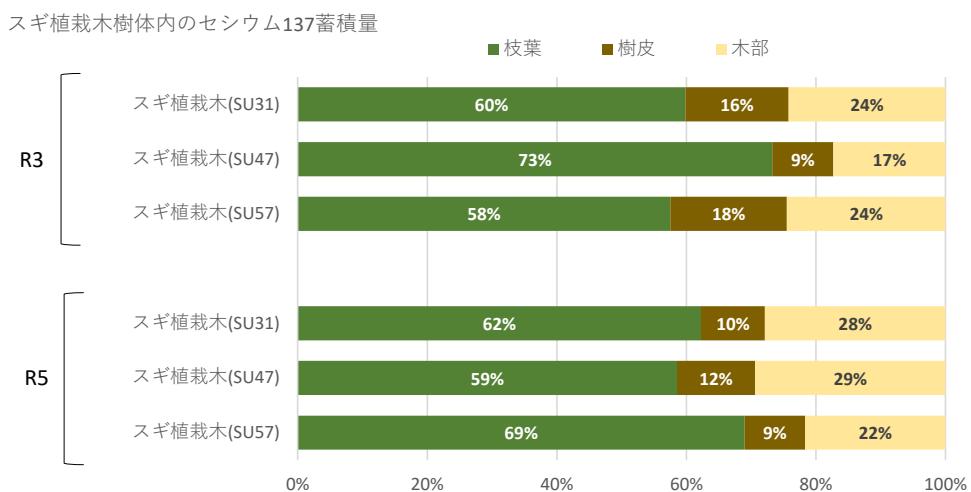


図3-16 植栽木調査区における地上部の部位別放射性セシウム蓄積量(割合)

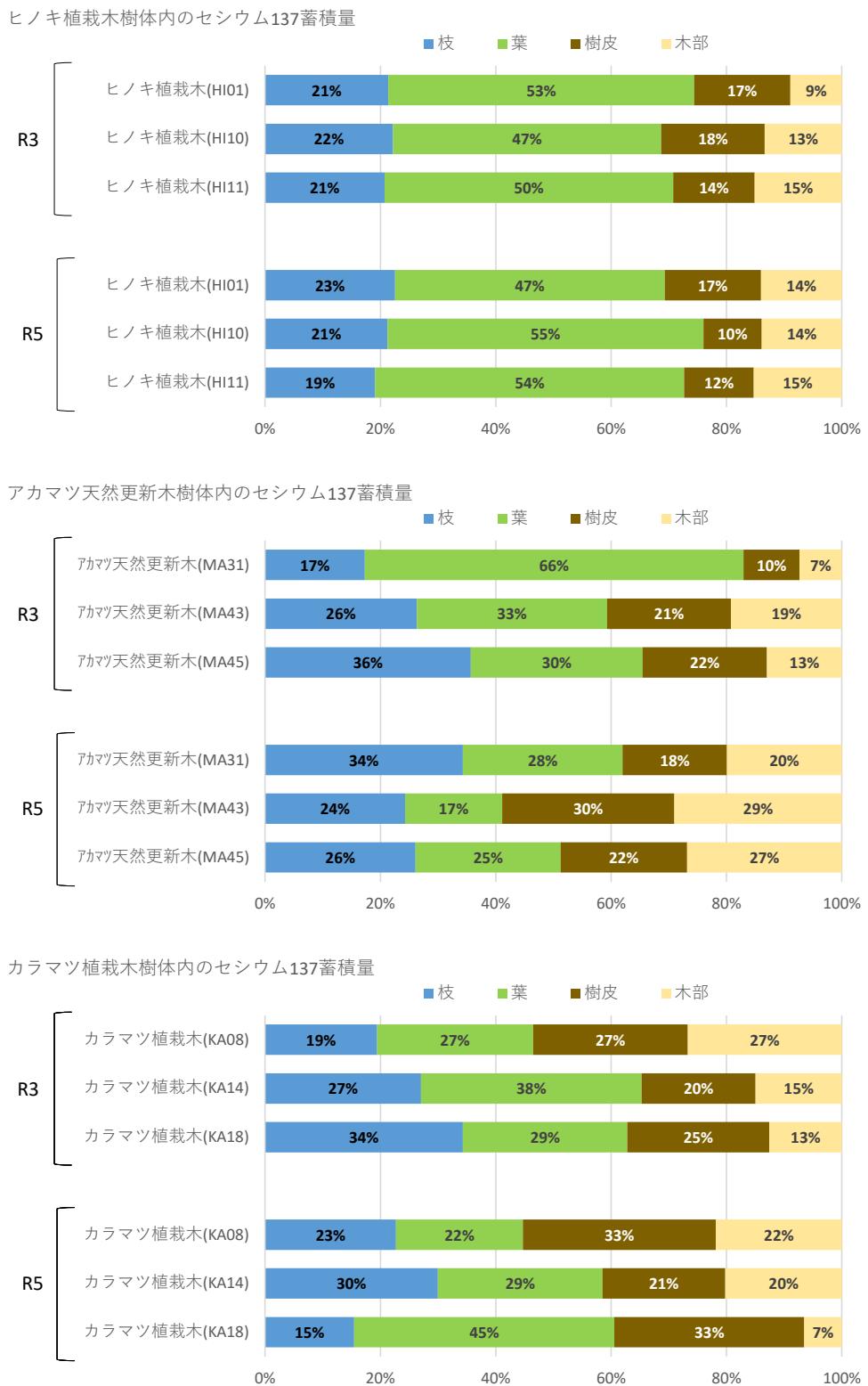


図 3-16 植栽木調査区における地上部の部位別放射性セシウム蓄積量(割合)(つづき1)

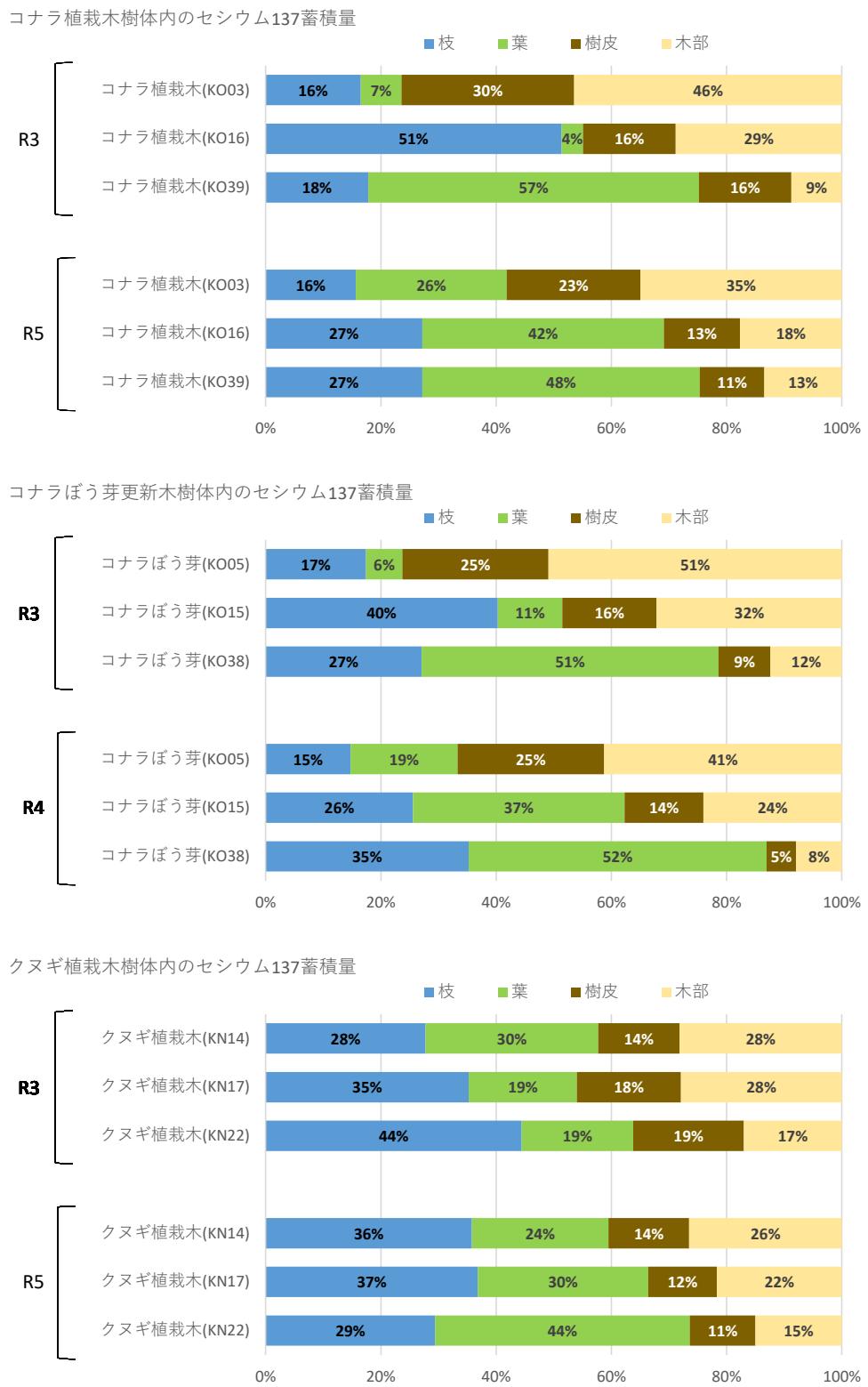


図 3-16 植栽木調査区における地上部の部位別放射性セシウム蓄積量(割合)(つづき2)

### 3.2. カリウムによる放射性物質吸収抑制効果の検証

#### (1) 試験結果

##### 1) 土壤中の交換性カリウムと放射性セシウムの濃度及び現存量

土壤中の交換性カリウム ( $K^+$ ) 濃度と現存量を図 3-17 に示す。

施肥区における土壤の交換性カリウム濃度は、堆積有機物層では 1 回目の施肥の翌年 2015 年 12 月には顕著な増加が確認された。一方、土壤 0-5 cm 層及び 5-10 cm 層では、追肥が行われた 2017 年にかけて徐々に増加した。しかしその翌年の平成 30 (2018) 年 7 月には、土壤 0-5 cm 層の交換性カリウム濃度は、平成 29 (2017) 年 12 月の 0.34 mg/g から 0.18 mg/g に約 4.7 割程度減少し、それ以降、同水準以下で推移した。ただし、無施肥区との比較では、施肥区で交換性カリウム濃度が高い状態が継続し、今年度もその傾向を示した。

交換性カリウムの現存量も濃度とおおよそ同様な変動傾向を示しており、土壤 0-5 cm 層及び 5-10 cm 層の交換性カリウムについては、濃度と同様に、施肥区で交換性カリウム現存量が多い状態が継続し、今年度もその傾向を示した。

なお、現存量については、追肥後 1 年目 (平成 29 (2017) 年) の 12 月には、現存量が目標値とする 166 kg K/ha を超えた箇所がみられている。また、土壤中の交換性カリウムの大部分 (9 割以上) は、土壤 0-5 cm 層及び 5-10 cm 層に存在している。

土壤中の放射性セシウム ( $Cs-137$ ) の濃度と現存量を図 3-18 に示す。

放射性セシウム ( $Cs-137$ ) 現存量は、平成 26 (2014) 年 11 月から平成 28 (2016) 年 12 月にかけて、無施肥区、施肥区とともに堆積有機物で減少、土壤層 0-5 cm では、増加する傾向を示したが、平成 29 (2017) 年以降は顕著な傾向は確認されない。

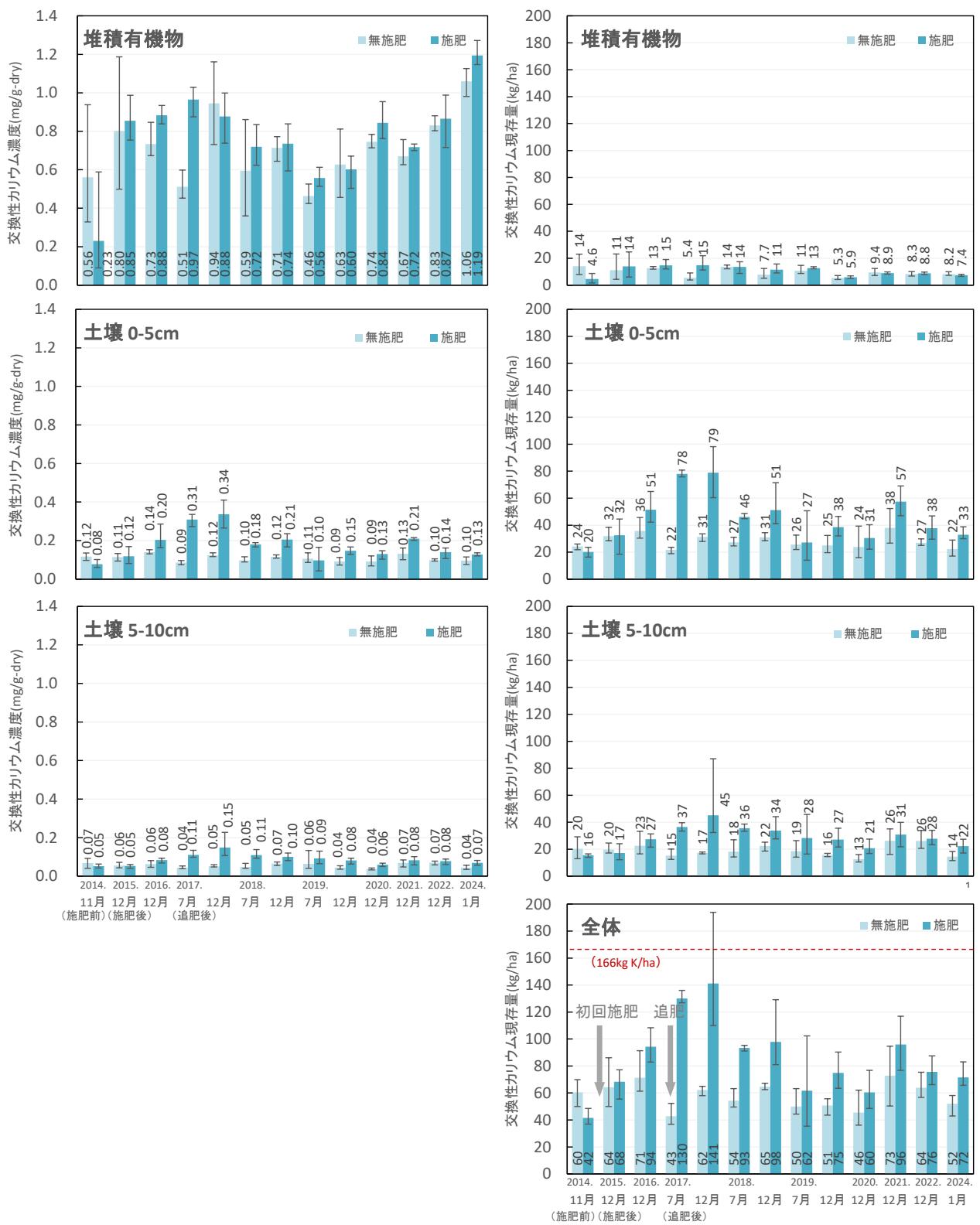


図 3-17 土壤中の交換性カリウム( $K^+$ )の濃度と現存量

土壤中の交換性カリウム現存量の目標値を 166kg K/ha として、1 回目は平成 27(2015) 年 1 月にケイ酸カリウム ( $K_2O$  : 20%) を 1 t /ha、2 回目は平成 29(2017) 年 2 月に塩化カリウム ( $K_2O$  : 60%) を 330kg/ha 施与した。 試料数は、各年、施肥・無施肥でそれぞれ  $n=3$ 。 値は幾何平均値、エラーバーは最大値と最小値を示す。

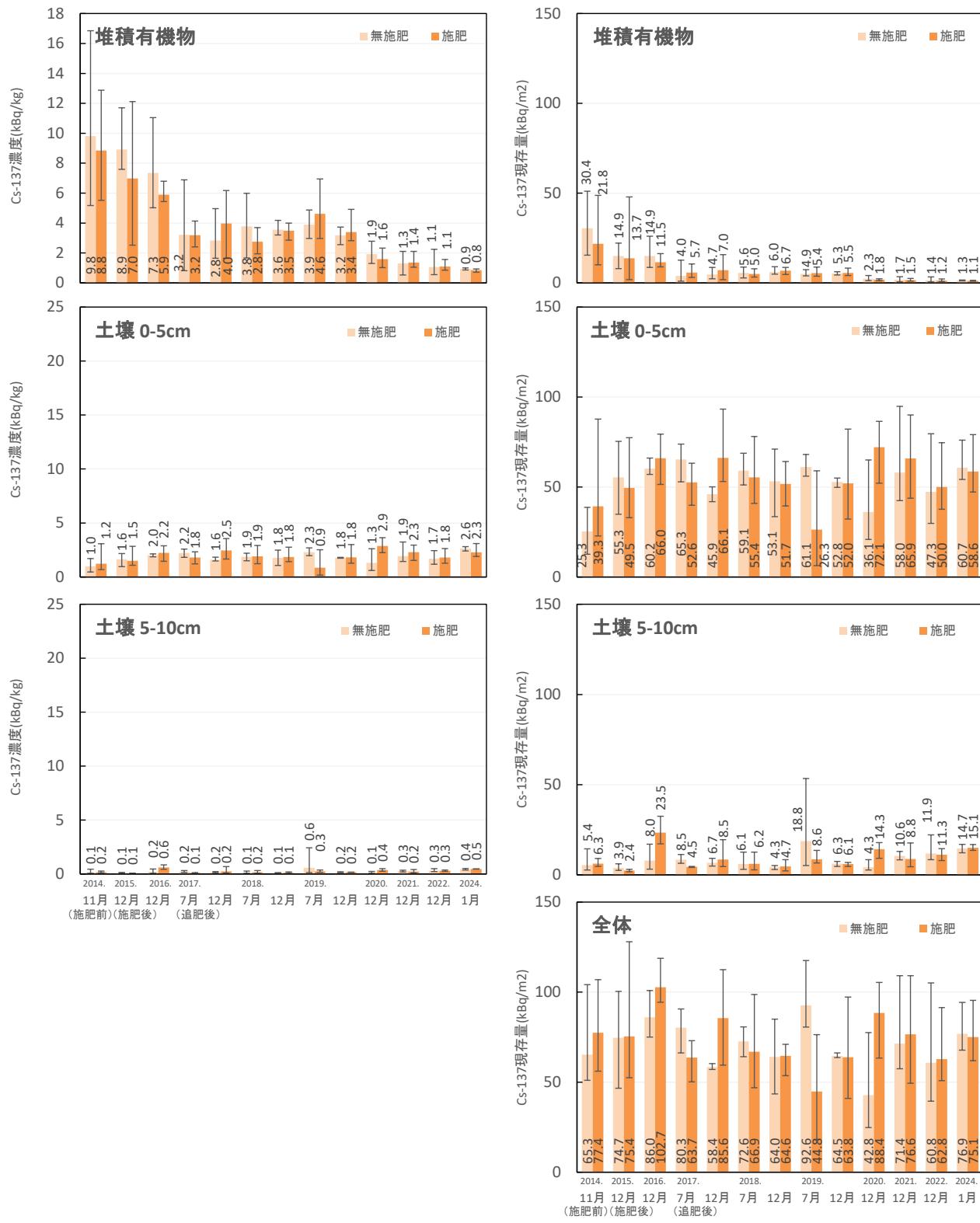


図 3-18 土壤中の放射性セシウム(Cs-137)の濃度と現存量

放射性セシウム(Cs-137)濃度は、令和6(2024)年1月18日時点に物理的減衰補正した値を示す。試料数は各年、施肥・無施肥でそれぞれn=3。値は幾何平均値、エラーバーは最大値と最小値を示す。

## 2) 植物体の放射性セシウム濃度（参考）

平成 29(2017) 年の 12 月までは、施肥区における土壤層の交換性カリウム濃度及び現存量は上昇し（図 3-17）、それに伴い、施肥区のコナラの放射性セシウム（Cs-137）濃度の低下が確認された。

施肥区のぼう芽更新木の放射性セシウム（Cs-137）濃度は、平成 29(2017) 年 12 月に 142 Bq/kg で、平成 28(2016) 年 12 月と比較して有意に低下した（5 % 有意水準、図 3-19）。この低下は、過年度事業での解析から、施肥による効果と解釈できた。平成 29(2017) 年 12 月以降は、大きな変化がないが、施肥区のぼう芽更新木の放射性セシウム（Cs-137）濃度の方が低い値で推移している。

植栽木については、平成 28(2016) 年 12 月から平成 29(2017) 年 12 月にかけて、放射性セシウム（Cs-137）濃度が低下した。また、無施肥区と比較しても、施肥区の植栽木が有意に低い濃度を示した（5 % 有意水準、図 3-20）。その後、施肥区の植栽木の放射性セシウム（Cs-137）濃度は低い値で推移したが、令和 4（2022）年度は、植栽木の放射性セシウム濃度が増加し、無施肥区との有意な差が認められなくなった。

植物体中のカリウム濃度は、追肥後の濃度変化に関して明らかな傾向が示されなかった（図 3-19、図 3-20）。放射性セシウム濃度とは異なり、施肥区と無施肥区とで、ほぼ同程度の濃度を示している。（令和 3（2021）年度以降測定中止）

### <放射性セシウム (Cs-137) 濃度>

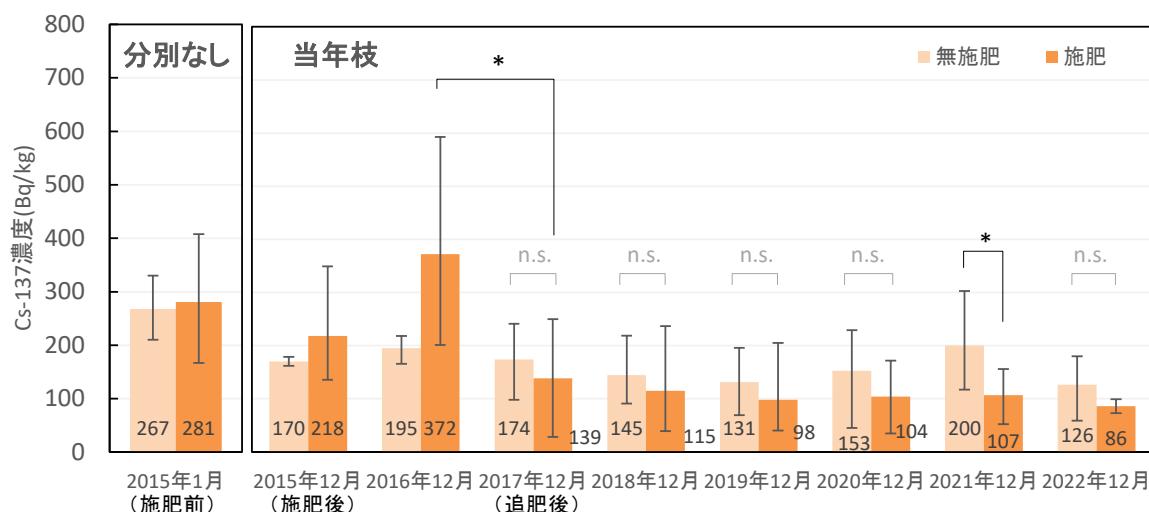


図 3-19 コナラぼう芽更新木の放射性セシウム(Cs-137)濃度とカリウム(K)濃度(過年度参考)

放射性セシウム (Cs-137) 濃度は、令和 4 (2022) 年 12 月 12 日時点に物理的減衰補正した値を示す。試料数は平成 29 (2017) 年 12 月分以降は施肥・無施肥それぞれ n=6、それ以前は n=3。エラーバーは最大値と最小値を示す。図中「\*」は有意差を示す (5%有意水準、スチューデント t 検定)。「n. s.」は検定を行い有意差がなかったことを示す。

### <放射性セシウム (Cs-137) 濃度>

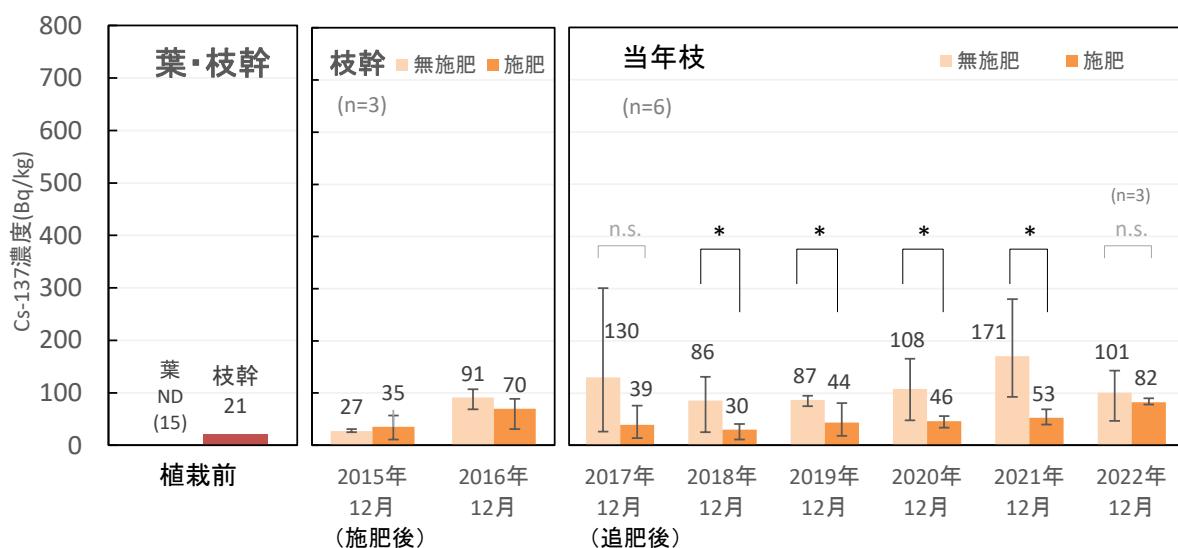


図 3-20 コナラ植栽木の放射性セシウム(Cs-137)濃度とカリウム(K)濃度(過年度参考)

放射性セシウム (Cs-137) 濃度は、令和 4 (2022) 年 12 月 12 日時点に物理的減衰補正した値を示す。N. D. は検出限界未満を、() 内の値は検出下限値を示す。試料数は植栽前 (平成 26 (2014) 年 11 月) が n=1、植栽後は平成 29 (2017) 年 12 月分以降は施肥・無施肥それぞれ n=6 で、それ以前は n=3。エラーバーは最大値と最小値を示す。図中「\*」は有意差を示す (5%有意水準、スチューデント t 検定)。「n. s.」は検定を行い有意差がなかったことを示す。

## (2) 考察

当該試験地においては、水溶性（速効性）の塩化カリウムを用いて平成 29(2017)年 3 月に追肥を行った結果、4 カ月後となる平成 29(2017)年 7 月時点で土壤中の交換性カリウム濃度及び現存量は大きく上昇し、平成 29(2017)年 12 月には、区画によっては、目標値である 166kg K/ha (20g K<sub>2</sub>O/m<sup>2</sup>) を超えるまで上昇した（図 3-17）。それにより、コナラぼう芽更新木及びコナラ植栽木とともに、放射性セシウム濃度が低下した。

土壤中の交換性カリウム現存量が流亡等により減少することで、コナラへの放射性セシウムの吸収抑制効果の継続性に影響が生じるかをモニタリングすることが着目点の一つであったが、交換性カリウム現存量は必ずしも減少傾向ばかりではなかった。コナラの当年枝の放射性セシウム濃度、面移行係数は施肥区で低く抑えられており、カリウム施肥による放射性セシウムの吸収抑制効果は、追肥から約 5 年経過時点となる令和 3(2021)年 12 月時点で、コナラぼう芽更新木及びコナラ植栽木とともに継続していたとみられる。

ただし、当該地のコナラ植栽木及びぼう芽更新木の調査個体の成長が著しく悪く、コナラ原木林として維持できていない可能性があり、コナラ植物体を用いての評価が困難なため、今年度は土壤のみの調査を実施した。令和 6 (2024) 年 1 月時点で、土壤中の交換性カリウム現存量は前年度とほぼ同程度の水準を維持しており、無施肥区より施肥区の方が、濃度が高く現存量が多い状態が継続していた。

なお、本試験結果は、過年度事業において、多点調査の結果とも比較した上で施肥による効果が得られたことを確認しているが、あくまで 1 地域のみでの実施結果であり、施肥による影響の表れ方には、土壤特性や土地利用履歴等による影響が大きく一定ではない可能性があることに留意する必要がある。

カリウム施肥効果の継続性評価については、実際の林地での長期調査による知見が少なく、当該地における中長期的な調査結果は有意義である。蓄積されたデータを活かす上でも、植物体を調査対象したいが、コナラを用いた評価が困難な状況にあるため、今後は、調査区内の他樹種を用いた評価方法についても検討することが望ましい。

